

同志社で学ぶことのプラス

押本 年真	同志社大学言語文化教育研究センター所長 同志社大学言語文化教育研究センター教授
講師紹介【おしもと・としまさ】	〔研究テーマ〕 ①一九～二〇世紀イギリス小説の研究、②日本人はイギリス文化をいかに理解してきたか

創立一三〇周年の同志社

押本でございます。同志社スピリット・ウィークということで、私が今学期最後のようですが少しの時間話をさせていただきます。同志社は今月二十九日で創立一三〇周年を迎えるということでもあります。二人の教師、そしてごく少数の学生で折りをもってスタートした同志社という私立学校ですが、いろんな困難、経営難ということもあったでしょうし、また京都は巨大な仏教都市でもありますから、キリスト教主義に基づくことによるいろんな困難があったと思います。第二次世界大戦中を典型として、いろんな時代に日本のあちこちから、いわば圧迫を受けたといっても過言ではないと思います。近代日本では「官尊民卑」と呼ばれる価値観がかなり強くあり続けたと思います。従いまして同志社はいろんな苦難を経て、この創立一三〇周年を迎えたということになります。

新島襄先生をはじめ多くの先人の努力、協力者、あるいはさまざまな時代ごとにここで学びました学生、そして卒業生の活躍、そのようなものが相まって、現在、社会のさまざまな方面からの評価や支持を相当に受けていると思います。

いま、そういう情報が溢れ過ぎているようですが、各大学の就職状況はどうかとか、各種の国家的な資格試験等の合格状況はどうかというようなことでは、同志社はなかなか成績が良いといっていいただろうと思います。そして今日では、これは計算の仕方にもよるでしょうが、教職員一〇〇〇人、さらに嘱託を入れますともっと多数の人がこの場で働いていますし、学生数は約二万五〇〇〇人ということでもあります。九学部、十一研究科、そしてこのキリスト教文化センター、言語文化教育研究センターのような教学機関、研究所、いろんな研究グループを見ますと、教育研究において規模が大きいということが果たして良いことばかりと言えるかどうか問題はありますが、まずは喜ぶべき発展の姿と言っていいてまいしょう。現在ここで学ぶ学生もこのような歴史の上に存在している同志社大学で学んでいるというわけでありまして。同志社は今日でも見方によってはかなり特色がはっきりしている大学と言えるかもしれませんが、非常に激しい社会の変化、大規模化の中で同志社としての特色が希薄化する恐れがあるだろうと思います。この同志社スピリット・ウィークの行事などを通して同志社の建学の精神、伝統を再確認し伝えていくということも貴重な営みだと思っております。

同志社で学ぶことのプラス—私の経験から

さて本日、私が選びましたこの話のタイトルは「同志社で学ぶことのプラス」と、かなり前に付けたのですが、考え方によってはずいぶん実利的に響くタイトルだと思います。ご出席者の皆さんにもこれで何を話すのか連想がわくかもしれません。たとえば先ほど、就職とか各種試験の合格状況について、昨日でしたか、司法試験で同志社の合格数は八位ぐらいたったと出ていました。総長は法律家ですからもっと早くキャッチされていたみたいで七位らしいとおっしゃっていましたが、結果的には八位でありましたが、それにしても好成績といえば好成績なわけでしょう。現在では同志社は相当な知名度を持って、特に関西圏では名の知れた大学ということでありまして、こういう整った大学で勉強するということは学生にとってプラスでありますし、この大学を出たことによる、いわゆるプラスの面というのはいろいろとあると思います。しかしながら今日の私のお話はちょっと違ひまして極めて経験的、私自身の経験に基づくようなお話をさせていただきます。

同志社大学で学ぶことにはいろんなプラスがあると思います。私自身はこんな角度から一つのプラスがあったと思います。私自身が一九六〇年代の半ばから終わりにかけて同志社大学の文学部英文学科に入り、そこを卒業し大学院で修士課程も終えました。短期間別の学校で、そしてその後、同志社大学に来て非常に長い期間英語を教えてきましたし、イギリスの文学、イギリスの文化とは何かを教えてきました。そういう人間にとって同志社大学で学んだことのプラスというのは一体なんであるかと振り返って考えます。私は同志社大学文学部英文学科で学びました。入学した当初から一貫して非常に真面目によく勉強する学生ではなかったのですが、四年間全体を通したらそこで多くのものを得たと思っております。内容的にはなかなか充実していて、少なくとも私にとっては面白い分野であったと思います。良い先生方とか友人にも出会えたと思います。しかしこれは日本で、文学部で英米文学を勉強するという例はたくさんあり、かえってあんまり意識していないかもしれませんが、同志社大学で学んだ場合に英語の力が付くとか、研究方法とか姿勢とかいった以外に大きなプラスがあったと思います。それは文学部、あるいは大学院での正課においても大学全体の教育内容においても、キリスト教の基本的な考えに触れることがありました。たとえばその当時は宗教学とっていたのかキリスト教入門という科目であったのか分かりませんが、そういう科目もありましたし、折りに触れてキリスト教について触れる話をされる先生もおられました。またクリスチャンの友人に会うことによってキリスト教とは何かを知りました。これはあくまで知ったという知識として知ったということです。

学生時代のほとんど終わりごろになりまして、その時期は学生運動が当時盛り上がった時代なのですが、そういう政治の季節のようなことにあまり関係なく、私は極めて個人的な事情も重なってクリスチャンになりました。広い意味でいえば結核性の病気でしようが現在であれば初期に治せば簡単に治りますが、ちょうど私が幼児のころというのは第二次世界大戦直後ですから医療の状態がいいはずがなく病気に苦しんだようです。そういうこともいくらかありますし、他にもいろんなことがありましたので、洗礼を受けましたから、その前後から他の人よりは聖書を読むとか、キリスト教の礼拝も出席するとか、祈るというのが、同志社大学で学んだ場合に英語の力が付くとか、研究方法とか姿勢とかいった以外に大きなプラスがあったと思います。それは文学部、あるいは大学院での正課においても大学全体の教育内容においても、キリスト教の基本的な考えに触れることがありました。たとえばその当時は宗教学とっていたのかキリスト教入門という科目であったのか分かりませんが、そういう科目もありましたし、折りに触れてキリスト教について触れる話をされる先生もおられました。またクリスチャンの友人に会うことによってキリスト教とは何かを知りました。これはあくまで知ったという知識として知ったということです。

文学とキリスト教

こう申しまして、文学部の科目、あるいは大学全体の科目の中に、キリスト教との関係が明示的な「キリスト教文学」というタイトルの科目が特にあったわけではありません。それから宣教師の資格で大学におられる先生にアメリカ文学を教わったりということがありましたが、そういう先生が護教的という言葉がいいでしょうか、キリスト教を広めるとか擁護するというような発言をされたわけではありません。ただキリスト教というのはどんなものなのか、それについての意識はやはり振り返ってみれば同志社だから身についたのかなと思うことがあります。これは現在もそうなのか、あるいはそうであっても学生がどれだけ自覚しているかはちょっと分かりません。

ちょっと脱線話になるかもしれませんが、非常に優れた国立大学を出られた人でも英米文学とキリスト教の関連については本当に意外に何にも知りません。そういう点からみれば、同志社で学んだことは、ある意味で非常にプラスであると思います。日本におきましては明治から、〇〇英学塾とか英学校とか、〇〇大学文学部英文科というものがあるのが相当数あります。この中で非常に微妙な問題ですが、文学を教えるということを通してキリスト教を広めたいということが結構あるわけです。立派なテキストを読んでいくと、そこには必ず正しい一つの意味があって、それによってモラルをうるとか精神修養的なものをうるとかという考えが強かったのだと思います。

これはたとえば、東京大学というようなところに赴任した外国人教師などの影響を受けた日本人の学者でもそういう傾向が割に強くあったと思います。ところが、現在は言ってしまうと、そういう形でテキストは読みません。はっきり言ったら現在の文学研究の最先端は全くそういうことではないのであって、テキストをずっと読んでいったら正しい解釈というのが必ず一つ浮かがるというのに、むしろ反対の考え方のほうが現在では本を読むということに対する最新の考えだろうと思います。その背後にはいろんなものがあります。実際、こういう事情もあって近代現代文学をキリスト教の教えを素直に若い人に伝えるために教えるというのはほとんど不可能であります。というのは近代文学、現代文学の中にキリスト教批判、あるいは反キリスト教的なテーマの作品が多いからです。しかしながらここは微妙なところでありまして、反キリスト教的であるかどうか分かるのは、キリスト教を少しは知っていないと実は分からないのです。

たとえば私は、大学院の時はジョゼフ・コンラッドという小説家について主に勉強してそれで修士論文も書きました。学部の最後のころから興味を持ってその作家の作品について書きました。非常に変わった作家でしてポーランド生れです。貴族に近い立場の彼の父親は、政治犯として圧迫されました。帝政ロシアの属領のポーランドという状況が嫌になって、つてを頼ってフランスのマルセイユに行つて船乗りになるのです。大変なお坊ちゃん育ちの人が船乗りになるのです。この背後には陸地にある複雑ないろんなややこしいものから脱出してというような願望があったようです。船乗りになつてからは結構いろんな困難に打ち勝って、立派な船乗りになり、二十九歳でイギリスで船長の資格を取りましたから大変なものだと思います。そういう経験を踏まえまして、文学にはもともと興味があって、なんとポーランド生れの人が英語で小説を書いて、これが二〇世紀のイギリスで、ある意味非常に注目すべき指折りの作家になるわけです。彼が書いた中編小説『闇の奥』、英語の原題はHeart of Darknessは、これは実は、ヨーロッパの列強がアフリカでいかにひどいことをしたかを批判した小説であります。その中には聖書からの引用がいろいろあるわけです。悪く言えば、いかに聖書の中の文句を使って帝国主義的な時代に自分たちのやっていることを正当化するように使われうるのかも書いています。

ちなみに「地獄の黙示録」という映画がありました。ベトナム戦争を批判した、コッポラ監督によるものですが、これはコンラッドの『闇の奥』を下敷きにしております。また、『ノストロモ』という長編小説があります。「ノストロモ」というタイトルは男の人のあだ名によるものです。この小説では架空の国ですが、たぶんベネズエラのあたり南米のある国に銀がある。非常に地下資源があるので、その地下資源をめぐる初めはスペインなどがそこを植民地支配をしているのに対して、時代がだんだん移ってイギリスが進出し、さらにはアメリカがそこに進出してきます。貧しい国を欧米の諸国がいかに利用するかということです。そして中南米の地にキリスト教がいかに入っていくかを扱っています。そしてカ

トリックの信仰とプロテスタントの信仰との微妙な違いもうまく書き分けています。しかしこれは非常に手の込んだ難解な小説ですが、もう一つはキリスト教のことに全く興味がなかったら、ちょっとこれは分からない小説だろうと思います。しかし私の場合はこれは面白い小説だと思っていますが、こういうことも同志社で学んだことのプラスであったと思っています。

私の親しくしているこの大学の同僚だとか、同じ学会に属す親しい人でも、やはり学生時代にそういう「宗教とは一体何か」とか「キリスト教とは基本的にどういう教えを持っているのか」ということを学んでおくというのは非常に大きなプラスになったと言っています。たとえば二〇世紀で最大のイギリスの詩人である、T・S・エリオットと言われる人は、歴史とか宗教のことを非常に扱っているわけですが、これについて私の非常に親しい友人が言いますが、韓国の方がある面で研究のレベルは高いそうです。日本の方がはるかに研究者がいるはずなのに。その原因の一つは日本人がキリスト教のことをあまりにも知らないからだということです。専門家のようなことを言っているのだけれどもレベルが低いというわけです。

文学、文化と宗教を考える一つのヒント

私の申しあげたいこと、ちょっと分かっていたいただきたいことは、むしろ全く逆の方向から考えた方が良いのではないかとということで、お手元に縦書きの「文学、文化と宗教を考える一つのヒント」というハンドアウトがあるかと思います。これで考えてもらえれば簡単なことです。つまりいかに、ある文化圏に育った人にとっては簡単なことが、他の文化に育った人にとっては分からないかということです。俳句が非常に短いので分かりやすいだろうというのでいくつか例を選んできました。

たとえば、最初に正岡子規の俳句をあげております。一母の詞自ずから句になりてーこれは、皆さんほとんどご存知だと思います。「毎年よ 彼岸の入に 寒いのは」。これはほとんどの日本人が読んだら「ああ、そうだな」とすぐ分かると思います。それは日本人が「彼岸」とは何なのか、「彼岸の入り」というのはどのくらいなのかということを知っているからであります。子規のこの句は果たして四国、松山で作ったのか、東京で作ったのかと思いますけれども、確かに三月十八日くらいになるでしょうか、その感じですよ。もう春になりそうなのだけれども寒い。そしてお彼岸があって、それがすむと本当に春らしくなる。そして彼岸というのは仏教的な非常に意味のある言葉であります。これは日本人は、特に勉強しなくてもすぐに分かると思います。しかし、これをもしフランス人とアメリカ人が読んだらどう思うかということです。非常に難しい俳句です。エンジョイはまずできない俳句であります。こういうことが分かるかどうかということが非常に大きいと思います。その次は「さびしさは 秋の彼岸の みずすまし」。秋の秋分の日の方は、俳句では「秋の」と付けたら、「秋彼岸」と言うようですが、秋の水が少し澄んだときの「みずすましの秋」、ちょっと秋になってきたなという感じであります。

その次は、これはいかにも一茶らしいですが、「送り火や 今に我等も あの通り」。私たちは毎日生きているわけですが、結局あんなふうになってしまう。送り火で送られるような存在になってしまうだろう。そんなに遠くないということですね。こういう深い内容を簡潔に表現します。日本人にとってはすぐ分かるけれども、外国人にとっては本当に難しい俳句だと私は思います。

その次に川崎展宏（のびひろ）、これは現在まだ生きて活躍している俳人のようですが、こんな俳句があります。「太郎水漬き 次郎草生（む）し 茄子の馬」。この句について若い方にちょっと聞いてみたいのです。私の経験では大学院を出て三十歳くらいの人は「茄子の馬」が分かるのですが、この前教室で学部生七、八人に聞いても誰一人として「茄子の馬」を知らなくて、ええと思ったのですが、皆さんは知っていますか。お盆の時に茄子に割り箸のようなものでもいいのですが、足のように付けて、馬に見たてたものを、仏壇に置きまして、先祖の魂が帰って来るのに帰しやすいようにということです。そういうことなのですが、これは川崎は、自分の子どもではなくて、おそらく老女とその亡くなった息子たちのことを表現しているのです。計算すると八十代半ばでないと思うのですけれども、第二次世界大戦で、長男も次男も一生懸命育てたのだけれども太郎は海軍に入り、出征してどこか海の底に沈んでしまった。次郎はおそらくアジア大陸のどこかで倒れてそこで亡くなってしまった。「お骨ですよ」と帰ってきたかも知れませんがそういうことで終わってしまった。そして一九四五年の敗戦があって、それからその一人の女性は五十年生きてきた。これは一九九五年の作ですが、川崎は最後の五文字を「五十年」にしようかと思っただけらしいです。「太郎水漬き 次郎草生（む）し 五十年」しかし「五十年」は俳句ではちょっと重すぎると思って「茄子の馬」にしたということです。この短い句の中にお盆とは何か、そして特にこの場合、戦死した息子を思う母親の気持ちがこめられているわけです。

エリオットというイギリスの文学者の言ったことは有名ですが、一つの現代的な作品の中に実際にはいくつもの文化の伝統があると、一つの非常に前衛的な、しかし優れた作品は決して今、急に思いついてできたのではなく、その背後には文化の伝統があって現在の新しい作品があるのだということを言います。そういう観点から少し考えてみましょう。川崎展宏という人は自分の俳句を若干、解説した文章を書いています。その中で彼ははっきり書いていますが、三好達治の『測量船』という詩集の中に入っている「雪」という詩の中で、「太郎を眠らせ、太郎の屋根に雪ふりつむ 次郎を眠らせ、次郎の屋根に雪ふりつむ」と、こういう詩であります。太郎、次郎というのは日本では最もある意味では、ありふれた男の子の代表的な名前ですが、そういう子どもたちが育つ家の上に雪が降って行くのだということです。そしてさらに言えば、第二次世界大戦で亡くなった子どものことを言っているのが川崎の俳句でしょうから、この背後には「海行かば、水漬く屍、山行かば、草生す屍」これを踏まえているのであろうと。そしてこれは若い人はそうは思わないでしょうが、戦時中はこれにメロディーを付けて軍国主義のシンボルのような歌が流れてそれから多くの場合、「日本軍は今、勝っている」というニュースが流れたことを踏まえているのです。ですからたとえば、宗教に關すること、生活習慣、あるいは季節感にとんだ言葉を、（そして季節感というのは非常にしばしば実は宗教と農業に關係しています）、それを知っていれば実にいろいろなことが分かるのです。これはなかなか普段から少しづつ教わって、そういうことに意識を持たなければ、たとえば大学院でうまくカリキュラムを組めるものなのかどうかも分からないようなことですが、こういうことが分かるか分からないかということが、自分とは異なる文化が分かるかということにやはりなっていくと思います。

宗教と文化と言葉

私の息子が京都のある大学でお世話になりまして、もう使わないからと家に残したのが『仏教用語辞典』という辞典です。便利で時々引くと助かるのですが、お手元のハンドアウトに書いてある「接待」から始まりまして「愛、挨拶、天邪鬼・・・迷い」まで、これみんな仏教的な意味がある言葉なのです。「一期一会、因縁・・・地獄、浄土」このようなものは誰でもそうだと思うのですが、普段なんとなく使っている言葉にもみんな、仏教的な意味があるのです。これは本当に驚きます。そういう点では言葉は文化の核心にあるものですから、宗教というものを知っておれば非常に意味が分かりやすいということでもあります。ただ、言葉だけが入ったからといって本当に本来の意味が理解されていったかどうか、必ずしもそうだとは言いきれないところがあると思います。

たとえば、日本語に非常に深く入り込んだキリスト教用語というものがあります。ここに挙げておきました。「三位一体、洗礼、天使、天国、救世主、献金、復活」。たとえば、一番上に挙げました「三位一体」でもお分かりでしょうけれども、これは今だと小泉内閣が「中央政府と地方自治体の関係を、お金と権限と何かをセットで引き渡す、いや引き渡さない」ということを表すのに、「三位一体」を使っています。あらゆる新聞とかテレビのニュースで、三位一体をおびただしく使っています。しかし、本当に分かって使っている人は限りなく低いパーセントだろうと思います。それから「洗礼」でもびっくりします。若い選手がプロボクサーとしてスタートしたら、たちまちノックアウトで倒れてしまって「プロの厳しい洗礼を受けた」と。そんなふうにするものかと思うわけです。「天使」というのも思いがけないところでお店の名前とか、パチンコ屋で天国とかびっくりするところもあるのです。

ですから言葉が入ったからといって必ずしもうまくいくとは言えませんが、もともとの意味というのは知っていたら良いわけですし、たとえば外国の単語を覚える場合、私の場合は英語ですが、背景を知っていると実は分かりにくい言葉が意外によく分かるということがあります。背景を知っていると非常に覚えやすい単語、理解しやすい単語があるということここに挙げておきました。典型的なものはcreateやcreationでしょう。「創造する」ということです。この創造するということはやはり旧約聖書の最初にあります「神がこの世のあらゆるものを創りだした」ということであって、何かを原料にして何かに作り替えるというものはありません。全く何も無いものから、一から創りあげるという意味です。この意味をおさえていくことは非常に重要です。もっとも言葉というものはインフレになるものでして、英語そのものにおいてもcreateやcreationあるいはcreativeという形容詞がありますが、「あの人はクリエイティブな人だ」というような場合は言葉のインフレです。他の人よりは少し何か新しいことを考える、斬新なことを考えるというような意味でして、本当の意味でクリエイティブな人なんてそんなにいるものかという気はします。クリエイションは「創造」という意味ですが、「創られたもの」という意味もあります。キリスト教的に言えば「被造物」という意味だと思います。ところがクリエイティブの動詞を覚えても創られたもの、被造物だということをやはり創世記のことを押さえていない人にとってはなんでそうなのかと非常に分かりにくいものです。

神が全てを創ったという考えですが、これに対しまして非常に対照的だと思う言葉の一つにartというのがあります。日本人はartと言うと「美術」、それだけを思いますが、どんな意味で、どんな文脈でどういう意味でartは使われるかと言うと、artには実にいろんな意味があります。人間が作り出すものですね。場合によっては美しいもの、立派なもの、人間が技を凝らして作るものというような意味が強いです。ですからartfulというのがないことはないのですが、技巧を凝らしすぎたとか、作を凝らしたとかいうような意味になってくることがあります。必ずしもいい意味ばかりではありません。

そしてnatureという言葉もふつう「自然」と覚えています。たぶん英語に限らず欧米の言葉ネイチャーに相当する言葉と日本語でいう自然とは、それほど全部は重なりません。日本人が考える自然というのは非常に人間的な自然です。美しかったり、やさしかったりします。しかし、自然はそんなにやさしいものであろうかという気がすることはよくあると思いますが、英語のネイチャーというのは宇宙全体から人間及び人間が作ったものを引き算した残り全部がネイチャーではないかと私は思っています。つまり人間が作ったものを全部除く、人間的なものを全部除く、その後には人間にとって都合のいいものも悪いものもなんでもあるかと思いますが、全部ネイチャーではないのか、物事の本来ある姿、本来持っている性質という意味はそこからくるのであって、必ずしも人間の思い通りにはならないということでもあります。

それから一番上に挙げましたthe invisible hand（見えざる手）、これは結構宗教的な言葉ですが「見えざる手によって」、というようなことを、意外に宗教的でない文脈でも使います。「見えざる手」というのは難しい話になりますが、キリスト教の神様は人間の五感で感じるようなものではないといったら良いでしょう。もちろん目には見えない。神様はこん

な形をしているとか、そういうものではないのです。絶対的な観念の見えざる手というような表現はいくらでも出てくるわけです。こんなことはたとえばキリスト教のことを全く知らない関心のない人で、しかし英語がよくできる秀才の人にとって分かりやすい話かどうかで、invisible god handとは「見えざる神の手」という意味です。

そしてハンドアウトの下から二番のdesignという言葉です。最近、私はこの言葉にちょっと興味を持っています。日本語に入っている外来語のデザインはかなり意味が狭いのですが、英語でデザインというのはそういう意味もあるのかと思うようなことがあります。何かある状態がありまして、それに対して働きかけてこんなふうにしようと思うことがデザインです。ファッションなどのデザインをするとか、自動車メーカーが新しい車のデザインをする、とかいうようにデザインというのは実にいろんな意味があります。いろんな英文を読んでいますと「神のデザイン」というのがあるのです。はじめ私は何のことかと思いましたが、「神様がこのようにあるようにと神の配慮をもって宇宙を創られる、この世を創られる」という意味で、そういうこともデザインというのです。無の状態という少し仏教的になってしまいましたが、何もない状態から天地を創って陸と海を創っていきます。これもあった方がいだろうと神が創った。創造した。そういうこともデザインというのです。神が考えていた。意図していたことをデザインというのです。

ただこの説明は難しいと思っていたら偶然ですが、今朝の朝日新聞で目にしたのですが、この「デザイン」が問題になっているのです。アメリカの高等学校で生物を教える際の問題です。アメリカの地方には非常に超保守的なキリスト教の捉え方をすることがあって、たとえば現代だとこれが当たり前だと思ような生物学を教えるのに対してなかなか抵抗があり、今ですらそれが残っています。確かに自然科学的、理科的に言えば世の中がこうしてできたと、生命はこういうふうにして誕生したということをお話するわけですが、ではなぜ最初にそういう現象が起こったかというところは、それはもう自然科学の関知しないことかもしれません。そういう疑問はあるかと思います。それに対してやはり何かの歴史を動かす力が働いて、今の世の中ができたのだという説明をしたいわけです。これをするとなぜ宗教的になってしまうかと思えます。天地創造の神様がデザインをされたのだということを果たして高等学校、特に公立の高等学校で教えることは、政教分離と言いますか、特定の宗教に基づいたそういう教え方をすることはどうかという論争なのです。それが、朝日新聞のこれだけのスペースで記事になっているのですが、私が思ったのは、この記事がどういうことを意味しているかが分かる読者が、朝日新聞の読者の中で何パーセントいるのか、そのこと自体が疑問ということでもあります。こういうことでありまして、やはり外国語というものはある部分に関しては、技術的に努力すれば身に着く部分があるのですが、どこかではちょっと迂遠なようなことも知らないとなんかにはなかなか分からないことでもあります。

「嵐が丘」を読み解く

もうだいぶ終わりの方に近づきましたが、イギリス文学にもう一度話を戻して、最後に文学以外にも果たしてそういうことが言えるだろうかということで締めくくりたいと思います。タイトルとあらずじはほとんどの方が知っている名作についてであります。一九世紀半ばにイギリスで出ました、エミリー・ブロンテという作家の『嵐が丘』という小説です。彼女の小説はこの一編で、後は詩を書いています。小説を一作書いて世界の名作になった非常に珍しい人です。

キャサリンという女性が出てきて、ヒースクリフという男の子がリパプールの港町で、アーンショーという、慈悲深いといっている、金持ちの紳士に出会って、その困っている孤児を家に連れて帰ってくるといことからいろんなドラマが起こります。そして、その家でいろんなことがあった後に、小説の語り手になりますロックウッドというロンドンからの紳士が、田舎でちょっと暮らしてみるかというような、やや物好きな気持ちを起こしてヨークシャーのある村にやって来て、ここを借りようかと思うのです。何か不思議な家だな、変な家だなと思うことがいっぱいあるのですが、迎いにはホテルもありませんし、その家に泊めてもらうことになるのです。

この『嵐が丘』というのは非常に単純なストーリーなのですが、読んでみると結構難しいです。小説の書き方としてはかなり手が込んでいます。一つには、夢が出てきて非常に幻想的な場面が出てきますので、これをどう考えるかで、結構ややこしいことになります。そのひとつの場面で、ロックウッドが居眠りをはじめようかと思いつつ聖書の端っこに書かれている書き込みを見るわけです。そうすると「七たびの七十倍、そして七十一倍目のはじめに」ということが書いてあるのです。「ギマドン沼の分教会のジェイバス・ブランドラム師による敬虔なる説教」と、これは「マタイによる福音書」の一八章を踏まえているわけですが、それに関係する夢を見るのです。

彼は眠りにくいで、うとうとと眠ると変な夢を見るのです。そしてジョウゼフというこの小説の中で一番不人気な嫌らしい、しかし自分では自称「真面目なクリスチャン」というのが夢にまで出てきて雪の道を案内してくれます。教会のようなところに入るとブランドラムという人がお説教をしているのだが、そのお説教は人を攻撃するような内容で、それぞれが退屈でたまらない。だけど我慢してずっと聞いているわけです。「この教会というのは非常におんぼろになっている。教区民は牧師の給料が高すぎる、謝儀が高すぎる、これ以上びた一文出すものか」という感じですが、しかしそこには熱心な聞き手がいる。教会に集まっているその人にお話をするわけですが、どれもこれも感心しないし腹が立つような説教ばかりです。それをずっと我慢しているわけです。四九〇聞くわけ。四九一になると我慢の限界だと感じて「俺はずっとここであなたの四九〇項目の説教を聞いたわけだけれども我慢できない」と、わっとしゃべりだしたら、今度は周りの人に「お前こそんでもない奴だ。罪人だ」と言って自分の方に向き合っている人がやって来て打ち叩くわけです。それで目が覚めたということです。

これを読んでいたら日本人の読者には無駄なことが書いてあるような気がするのです。この場合は聖書を踏まえていますので、キリスト教について全く知らない読者は（日本ではこの人が多いと思いますが）「何でこんな無駄なことが書いてあるのだろう。訳が分からないところだ」と思う人がいると思いますし、そして言ってしまうと日本でイギリス小説を研究しているブロンテについていくつか論文を書いた人ですら、ここはいわば、飛ばし読みをするというところですよ。

このブロンテ姉妹というのは有名であって、シャーロット・ブロンテ、エミリー・ブロンテ、そして最近評価されているアン・ブロンテ、この中でエミリーが一番キリスト教に対して反キリスト教といっているかと思うような部分も確かにありますし、微妙なスタンスであります。一番末娘のアンがたぶん一番素直なクリスチャンです。シャーロットは熱心なクリスチャンだけれども、その熱心さというのにはちょっと疑問を呈したいところのあるクリスチャンであります。そんなこともありましてエミリーは非常に気性が激しいとかいうようなことも言われていて、彼女は反体制的な、宗教なんて古臭いものに対してこだわりのない作家だから好きだという人が多いのですが、どうもそうは言い切れないように思います。

ロックウッドが奇妙な夢を見るこの場面は、聖書のある箇所を踏まえています。ペテロがイエスに聞くわけです。「主よ、兄弟がわたしに対して罪を犯したなら、何回赦すべきでしょうか。七回までですか」と、これは人間的にはよく分かります。自分たちにとんでもないことをした人たちを七回も赦せば辛抱強い方でしょう。ところがイエスはびっくりすることを言うのです。「七回どころか七の七十倍までも赦しなさい」と、四九〇です。だから「四九一」というタイトルの映画すらあったそうなのですが、それはもう限界を超してしまったという意味で、分かる人にはキリスト教文化圏ですぐに分かることらしいですが、日本人には分からないということです。『嵐が丘』について言えば、こんな嫌らしい訳の分からないことを書いてある変な場面だから、エミリー・ブロンテは反キリスト教であつたに違いないという解釈が日本では多数派なのです。

私は、二、三年前に京都で開催された学会に招待されて講演に来ました、『ブロンテ姉妹と宗教』という研究書を書いた北欧の女性の研究者にお会いしました。その人の書いたことは、非常に示唆的です。こういう場面もあるのだけれども『嵐が丘』全体を見ると実は「赦し」がテーマではないかとその人は言うのです。私がそれに一〇〇パーセント賛成するかどうかは別ですが、その説を聞いてなるほどと思うようなところがありました。というのは『嵐が丘』という作品では、ヒースクリフという孤児であって非常にかわいそうな、しかも明らかに普通のイギリス人ではない、男の子が登場します。ジブシーの子ではないかという解釈もあります（ジブシーでもないと思いますが）。とにかく、普通のイングランドのちゃんとした多数派の家庭の子ではない男の子がキャサリンという女性と愛し合う関係になりますが、これがまた普通の男女関係ではない一種の非常に深い恋愛感情です。ところが彼はやはり弱い立場の人間でして、大胆には可愛がられていたのですが、大胆がなくなった後は、その直系の息子にとっては目障りな存在ですからいじめられるわけです。ヒースクリフはいじめられて、いじめられて、ついに嵐が丘というところから三年ほど姿を消して、そして今度は立派な紳士のようになって帰って来るわけです。そして非常に法律的な知識を持って、しかもギャンブルに強く、いろんなことをやって、かつて自分をいじめた人たちに復讐をします。これは凄まじい復讐であります。ところが小説の六割か七割進んだ後に随分小説のトーンが変わってくるのです。すなわち、ヒースクリフがこんな復讐をやっても仕方がないのではないかという感じでちょっとやさしい人になります。これはなぜかという解釈をするのは難しいことで、そこはうまく説明できないと感じる人が多いのですが、一つの可能性としては実はこの小説は「赦せ」ということを言っているのではないかと検討してみる価値があります。この「七たびの、七十倍も」という表現の中の「七」という数字は、聖書の中では神秘的な数字だそうです。従って七の七十倍という四九〇で、われわれの感覚からするとたいした数字ではないと思いますが、その当時の人びとにとってはほとんど無限に近いような数字と受け止められていたのではないのでしょうか。だから四九〇は二で割れる偶数だから神秘的でないというのは、今の時代の人間の感覚であって、そうではなからうと思います。

ただこういう議論そのものが同社で学ぶ学生さんの方が分かる可能性は強いのではないかと。私が申し上げたいことは、同社はキリスト教主義です。もちろん卒業生の中でクリスチャンになる人が総体的に高い比率になれば、それは創立者の考えに合うことでしょう。しかし新島はいわゆるミッションスクールと言いますかクリスチャンの数をとにかく増やすということで同社を創ったのではないと言われていて、やはり、それぞれの学問とか異なった文化の背後にある、根本にあるものをしっかりと教えるのが、この学校のやるべきことだろうと思います。そこにその存在理由があるのだらうと思っております。今日は語学とかイギリス文化の狭い専門の範囲のことでも申しましたが、しかしこういうことは政治学だとか外国の歴史とかいろんなことを勉強する場合にも、美術史を勉強する場合にも同じことは言えるだろうと思います。つまり外国の文化圏にとって当たり前のことが、私どもにはやっぱり一番難しいことなのです。

異なる伝統と価値観を正確に伝える大切さ

最後に私のあるクラスで参考書に挙げています本の中の福沢諭吉の言葉です。福沢諭吉は同志社の創立者の新島とほぼ同時代人で、新島とはまた違った角度から違ったやり方で異なった欧米の文化に触れた人だらうと思います。そして二人とも教育に情熱をささげました。福沢の場合は経済学など社会科学的な考え方を主に取り入れました。またジャーナリストとしての才能があり、その面でも活躍しました。新島義は教育とキリスト教ということを通して日本に影響を与えたと思います。

福沢が晩年に、自分の一生をやさしい言葉でうまく書いた『福翁自伝』という、日本のオートバイグラフィの傑作と言われている本の中に、こんなふうに言っています。彼は三回使節団に参加して欧米を見て回りますが、その前に横浜でこれからはオランダ語でなく英語を勉強しなければと痛感する経験をして、一生懸命英語を勉強し始めます。漢学そして蘭学をしていたのですが、英語で勉強をしようとしてやるわけです。それで、日本でも本を手に入れて、一生懸命読みます。そして日本にいて「原書を読んで分からないところは辞書を

引いて調べさえすれば分からないことはない。それで外国の人に一番分かり易いことで字引にも載せないということがこっちでは一番難しい」。私はここが一番感心するところです。当たり前すぎて字引に載ってないのです。「だから原書を調べてソレで分からないということだけをこの逗留中（ヨーロッパにいる時に）調べておきたいものだと思って」、その方面でこれは相当立派な方だからこの人に聞けば分かるのだらうと思って聞くわけです。ところがあまりにもその文化圏の中では当たり前のことは簡単には、説明のしようもないということなのです。

私が一番驚いたのは、福沢ともあろう人が（彼は近代日本の中で非常に頭のいい人で政治経済の洞察力の鋭い人だろうと思うのですが）、英国の国会議事堂に行って、国会の審議を見ても何をやっているのかさっぱり分からなかった。つまり野党議員が「何だお前」とか言って質問したり野次を飛ばしたりしていると、徳川時代の政治を経験していますから、將軍様がひとこと言ったら皆黙って聞くのであって、反論したり質問する人は誰もいない。三人以上の武士が集まって今のやり方ではどうもとか言うとか、お前たちはけしからんと言って罰せられる。そういう時代環境のもとで育ったので、福沢には全然分からなかった。今でいったら野党ですね、野党の存在理由というのは分からなかったのです。だから今の中学生の社会科を教えるときの感じ、野党の意義がのみこめない中学生がいますが、あの素晴らしい頭のいい福沢先生と中学生はその瞬間では一緒なのです。いかに価値観が違々と簡単なことが分からないかという一つです。

国際主義ということを同志社では言いますが、何か外国のことを知ってすぐにそれを実用的に使いますけれども、そういう速成的、応用的なことだけでは皮相であります。一つ徹底的にやるべきことは、全く日本人と日本の社会とは違う伝統とか価値観というものがちゃんとあるのだということ、これを正確に伝えるべきだろうと思います。それはどの大学でもある意味ではやるべきだと思います。特に同志社におきましては続けてやっていくべきだろうと考えております。

二〇〇五年十一月十一日 同志社スピリット・ウィーク「講演」記録